「ホ、ー、あるとな、何でおざるかな」
「他でもおざりませぬ、劍道と學問、これのみは人に何と申されても……」
「それはいかん横川氏、もつと碎けたもので」
「他にはおざりませぬ」
「貴殿、酒はいけるか」
「イヤ、樽柿とやら申すものにても、又奈良漬にても醉ふ事がおざりまする位ね」
「殼下戸か、それでは仕方もおざらぬな、然らば斯樣いたされい、定めるやうな斷るやうな愚圖〳〵にしてをかれては、其の中には又宜い工夫も出るでおざらうから」
といはれて勘平宗利、其のまゝに芹澤助右衞門方に厄介になつてる。然るに追〳〵と快擧斷行の間近くなるにつれ、勘平の目の色が變つて來た、と見るや助右衞

門もハテナと思ひ、
「扨は内藏介といふ智者も居る故、事によると吉良の屋敷へ討入つて、仇上野介の首でも擧げやうといふ、其の一味の内へでも加いつて居るかしら、多く得難い忠臣義士一人の甥の忠義を屈しさせる次第でもないか、今時には珍らしい人物の彼の勘平だ、既に主に忠を盡すもの、又必ずや我が身内に信義を盡さぬといふ者はない、然ういふ人間に死水を取つて貰へば安心だ……」
と女房にもいひ含めて、女の黑髮には大象も繫がれるといふ事があるから、若い女を一人、勘平に當がつてやらうと、方々の桂庵に賴んで置く、その中に傳手あつてやつて來たのがお花といふ若い美しい女だ、これを連れて來て、勘平に目見えをさせる、しかし忠義に凝つたる勘平の心は大盤石、ビクともせぬので、こそは如才のない助右衞門の女房、其のお花といふ女に向つて、
「お花や、お前、若旦那樣の氣に入つてさへ呉れゝば、此家の女房にもして上

げやう武家は堅くつて厭だといふなら、本家になつて町方へでも嫁入をさせて上げるから、何うか勘平さんの氣に入るやうにして下さいヨ」

と來たからお花も一生懸命、腕に縒をかけて隙を覗つてゐるやうな始末、勘平は是は困つた事が出來たと思つて居る、すると此方はそんな事とは知らないから雨の降る晩なんぞはお花の方から出掛けて往つて、

「若旦那恐しい雨で、お玄關の脇は怖くつて堪りませんから、濟みませんが何うか若旦那の假に寢かして下さいまし」

などゝ、寐亂れ姿の阿嬌な風して頻りにそれと思はせるは勘平宗利、木偶か金佛か、叩いても平氣なもの」

「さうか、それは可哀さうに宜いとも〳〵」

といふので、居ると思つて寢床を擔いで引越して來ると、勘平宗利ムックリ起き上つて、

「何も雨が玄關の脇ばかり降るといふ譯ではなし、拙者が是から玄關の脇へ行つて寢るから」

と夜半に引越しが初まる始末、何うするとも出來ない、その中に時期がますます切迫して來ると、勘平の擧動が愈々變になつて來たので、伯父の助右衞門が女房を呼んで、

「俺の居る時は勘平を出してもいゝが、俺の留守中には假令勘平が腹を切ると いつても、他出をさせてはならんから左樣心得なさい」

と堅くいひつけた、それを勘平も内々聞きつけたので、是は何うも困つたと思つて居る。然るに時至つて十二月の十三日、此の日泉岳寺の寺評定には幸ひと助右衞門が家に居つたので出られたが、翌る十四日といふ千載一遇の日になると、助右衞門が朝から碁のお相手として奥へ上つてしまつたので、サアしまつたと思つた勘平、是は愚圖〳〵して居ると一期の大事、何でも朝の中に出てしまはない

と、出そびれると考へたので、コツソリ支度を調へ置き、自分は何氣ない風をして助右衛門が女房の前へ行き、

「お早うおざりまする」

「オヤ、是は勘平さん、大層早く支度をして、何處へかお出掛けかへ」

「ハイ、左樣でおざりまする、朋輩の勝田新左衛門が、備前岡山の池田公へ仕込をいたしまして、本日佐野郡へ出立を仕りまするので、一寸早川まで見送りたいと心得、お暇を頂きに……」

「往くといふのかへ」

「左樣で……」

「成りませんよ」

「ハー」

「家を出ることはなりませんよ」

「それは又なぜで……」

「なぜと仰しやつても、良人が留守の時には、例へ勘平が腹を切るといつても出すなと、堅くいひつけてお出でになつたから、決して出すことはなりません」

「ハー、しかしそれでは餘り朋友の信義といふものが缺けまするによつて、一寸丙分で一時ほど……」

「いけません、病氣だといつて言譯をしてお置きなさいまし、病氣屆なら公議でさへ聞き屆けて下さるから」

「でもそれでは拙者が甚だ迷惑をいたしますれば」

「けれども出すなといふ云ひつけですから仕方がありません」

「宜けますまいか」

「宜けません」

仕方がないので勘平も其の儘スゴ〳〵自分の居間へ引返したが、思へば思ふほ

ど氣が氣でない、そこで又もや伯母の前へ出て、

「伯母さん」

「何です」

「誠に相濟みませんが、一寸お暇を頂きたうおざりまする」

「何處へお出の」

「實は今までお隱し申して居りましたが、本所邊の壽司やの娘と深く云ひ交しましたのがおざつて、所が其の兄に權太と申す惡者がおざりまして、今日中に金を五十兩持つて行つて遣りませんと、其の娘が女郎に賣られまするので、如何にも見て居ることが出來ません、甚だ恐れ入りますが、一ト走り行つて參りますから」

「勘平さん、もう少し嘘を上手に吐つてお出でなさいまし、赤穂ボッと出の國侍に、千本櫻の燒直しで欺かされるやうでは、留守居の女房は勤まりません、出

直してお出でなさい」

「いけますまいか」

「いけませんよ」

勘平又もやスゴ〳〵と引返したが、眞逆に一時殺しに殺して行ふといふ譯にも行かず、何うしやうと思つて居る中に冬の日の暮れ易く、はや日も沈んで四邊は宵暗の頃、いよ〳〵堪らなくなつたので又ぞろ勘平宗利、

「伯母さん」

を始めた。けれども伯母なるものも又なか〳〵の者だからいつかな手を引かぬ

「何です」

「一寸お暇を願ひたうおざりまする」

「勘平さん、一寸此處へお出でなさいまし、貴郎今夜に限つて大層家を出たがりますね、昨夜貴郎は溜息を吐いて、寢られなかつたでございませう、そして

刀の下緒を紫の和打に取り變へて居なすつたでせう、私も淺野のお奥を勤めて居られた人に聞きましたが、淺野家の家風として、いよ〳〵自分の大事となる時は、下緒の紐を取り變へるとかいふ話、覺悟をして居なさる樣子といひ今夜の樣子で見ると、赤穗の浪人が徒黨を組んで、本所松坂町の吉良樣へ討入つて內匠頭樣の御無念を晴さうといふお心組みでござんせう、私はテッキリさうと思つて居るのですが……」

「ド、何ういたしまして、そんな事が」

「オホ……、妙に周章なさるのね、だが然うでないとすれば何故そんなに出たがるのです」

「へー」

「へーではありませんよ、貴郎今夜は餘程何うかなすつて居らつしやる、早く床でも取つてお寢みなさいまし、其の中には使ひに行つたお花も歸りませうか

ら」

又失敗つたので今は勘平、猶豫しては居られない、時を移さば一擧の大事、此處は何うでも行かなければと、息を殺して雨戸をコツソリ、ヒラリ庭へ飛んで下りるが早いか塀を乘り越えて通用門の處へ來り、

「一寸願ひまする」

「オ、、是は横川氏か、何御用で」

「唯今花が買物に出でましておざるが、夜更の事とて心配いたし、一寸見てやりたうおざつて……」

「ア、左樣でおざるか、それは〳〵」

いひながらツト開けたる潛は虎の口、是さへ出れば後は一條道の千里一足虎の子走り。

斯くして快擧の一人に參與したといふが。それは兎に角、當時勘平が偶居した

本所林町から程遠からぬ所に、茶の湯の宗匠が居た、此の人何ういふ傳手のあつたものか、足繁く吉良の邸に出入するので、早くも是に目をつけた勘平宗利、しめたと許り此の宗匠の許へそれとなく云ひ入れて、遂に何時しか懇意な間柄となつた。

然るに此の宗匠、茶儀にはなか〳〵巧みであつたが、極々〳〵の惡筆であつた爲め何時も〳〵手紙の遣り取りは代書であつた、その故に、勘平も度々其の事を依頼されたが、何時も快く引受けて、言はるゝまゝに其の用を辨じてやつたので、宗匠も、是が眞逆に上野介を狙ふ赤穗の藩士だとは氣がつかないから、二なき者と信頼されて居た。或る日のこと、彼れは例の如く宗匠の家を訪れた、すると宗匠は非常に喜んで、

「イヤ是は〳〵好い時にお出下されたし、實は唯今、吉良樣からの御狀が參りましたのでな、其の返書を差上げねばならぬのではおざるが、御存じの其の何で

な、ハ……、又々一つ御厄介になりますので……」

と代書を頼まれた、勘平は吉良樣と聞いたので、思はず胸にドッキリ來たがさり氣なく、

「それはお易い御用、何の御遠慮に及びませうや、兎も角も御狀を拜見仕りませうかな」

と手に取つて披き見れば、思ひきや吉良家々職の手柬にて主人事近々麻布の御屋敷に引移られるにつき、來ん十二月の十四日、當邸お名殘の茶會を開かれ、御同僚衆を招かせらるゝによつて、其の席に連り、何かと御饗應の御周旋頼入るとある、サアしめた、此奴は早速内藏介の許へ知らさねばと、胸をドキつかせながらも筆とつて宗匠が返書を認めやつた、とは神ならぬ身の宗匠、勘平の胸の内しるに由なく、又もや一つの使ひを頼みこんだ、彼は頭を掻き〳〵、

「相憎今日は僕どもを他に遣しましたので折角書いて頂いた御返書を屆け呉れ

る人がないで、甚だ困却いたしますると暗に使ひを勘平に頼みたい口振、勘平是を聞いて何で遁さう、透かさず附入つて、

「それはさぞお困りでおごりませう、私にても宜しくば、一ト走り行つてお届け申して參りませう」

「イヤそれでは何うも餘り勝手で……」

「何、御遠慮には及びませぬ、遠くもない吉良様のお屋敷、直ぐに届けて參りませうから」

と、文箱片手に吉良の屋敷へ飛びこんだ、是が神崎與五郎のやうにコツソリ忍びこんだのでは聊か氣がとがめるから充分の偵察も出來ないが、宗匠の返書を持つて居るといふのだから勘平大威張りだ、態と家を間違へたやうな風をして、彼方をウロ〳〵此方をウロ〳〵さんざ屋敷中をウロつき廻つて悉皆様子を調べてし

つた上、これなら宜しと始めて返事を届けて歸つて來るや、直ぐ其の足で右の段々を石町の内藏介に報告した。そこで内藏介が大高源吾の報告と、今亦知らせて來た勘平の情報とを比べて見るとシックリ事が合つたので、さらばと茲に一擧勃發の火蓋は遂に切れたのである。

是より先、彼は一書を故郷の親友龍田某といふ人の許へ飛ばせた、勿論是を永訣の印にもと思つてしたのである、其の文中、一々事細かに一擧の次第を批評し其の同盟の人々から腰拔武士の姓名人數までも書き上げてある、

一筆致啓上候、其後は打絶、御左右不承申、朝暮御床敷存候、時分柄寒氣甚御座候、其御元貴公彌々御堅固被成御座候哉、承奉存候、私儀七月末より江戸表罷越、只今迄無恙罷在候、其御表滯留仕候中は、萬端御心易得貴意、恭存知候、兼て御存知之通存念之儀も最早一筋に相究まり、死も不日と相覺候、於此世は此書狀限之御暇乞に罷成候て、別而〳〵御殘多

奉存候、日頃は箇様の切におよび候ても、親をわすれ、兄弟知音を忘れ、十人に勝れ、木石の様にて、さる勇士ぞかしと、自慢に存じ候ひしが、不日之命に迫れば、其御地皆様之御事も思ひ出し、毎よりは御名殘おしふ存候、しかし落涙はものゝふの常にて候、最後之働におゐては、唐のはんくわい、筑紫の八郎殿にも劣申まじくと兼而覺悟御座候間、適いさぎよう打死可仕と御推察可被下候、委敷得御意度候へ共、死出のたび一筋に急ぐ身に御座候て、心も闇處、あら〳〵ながら若斯御座候、將又宿所親共儀偏に奉頼候、今度必死人數書付、掛御目候、

大石内蔵介　同　主税
吉田忠左衛門　同　澤右衛門
原　宗右衛門　片岡源五右衛門
間瀬久太夫　同　孫九郎

小野寺十内　同　幸右衛門
磯貝十郎左衛門　早水藤左衛門
間喜兵衛　同　十次郎
同　新六　千馬三郎兵衛
菅谷半之丞　潮田又之丞
近松勘六　大石瀬左衛門
中村勘助　富森助右衛門
赤植源蔵　矢田五郎右衛門
奥田兵左衛門　同　小四郎
堀部彌兵衛　同　安兵衛

此安兵衛義丈夫もの也、七月中に打果す覺悟にて、同志をかたらうために赤穂まで七月上旬に罷越武林只七、某に申聞たる者也、

大高源吾　岡島八十右衛門
矢頭右衛門七　貝賀彌左衛門
勝田新左衛門　武林只七
杉野十平次　村松喜兵衛
同　三太夫　倉橋傳助
毛利小平太　岡野金右衛門
茅野和助　不破數右衛門
木村岡右衛門　三村次郎左衛門
矢野伊助　御家足輕　吉右衛門
瀬尾孫左衛門　前原伊助
神崎與五郎

此兩人は商人に身をやつし、敵之屋敷へしのび入、樣子を度々窺、尤内藏

介差圖、今度此者兩人之言を用ゆ、
缺落之者爰に注す、

中村清右衛門　鈴田重八
中村理平次

此三人最前江戸表參着、爰元之取沙汰有之を聞、色を返じ、しきりに恐れ、理平次は去月二十日、清右衛門、重八は同廿九日に夜逃す、比興不及舌

田中貞四郎

去る六日に缺落

小山田庄左衛門

此者十四五日以前宿へ參度申罷出る、いまだ不歸候、樣子不知申候、大形色ありしと見ゆる、只今迄丈夫に相見ゆる者、某共に五十一人、
去夏籠城の覺悟之節、臆病を働、悔先否、大學殿善惡を窺樣々申分いたし、

テダテを以、山科内藏介へ參、首を下、手を束、同志之人數に入、又今度之首尾に恐れ、すみやかに逃る大臆病者共を爰に注す、

粕谷勘左衛門　井口忠兵衛
杉浦順右衛門

此者きたなき奴也、當春伐てすて申筈にて御座候處に、手のびにいたし、取逃し候て殘念〳〵、若御參會も候はゞ、此旨御心得可被下候、

右同斷大腰ぬけ

田川九右衛門　酒寄作右衛門
木村孫右衛門　松本新五左衛門
井口半藏　大塚藤兵衛
田中代右衛門　橋本次兵衛
土田三郎右衛門　前野新藏

生瀨十左衛門　三輪喜兵衛
里村伴右衛門　田中序右衛門
梶半左衛門　近藤新五

此内おかしきは土田三郎右衛門、生瀨十左衛門にてとゞめ候、内藏介江戸表被罷越之由聞つけ、能事とおもひて、不日に京都にまゐられ、内藏介右之覺悟を聞屆け、色を失ひ、身ぶるひ被致候て、速に逃る、國にかへり、女房共と相談いたし、又重ねて可參との返答こそ笑止かな〳〵、

是ものどものことは、輕きものゝ事にても候へしが、筆にも言にも不及る者爰に注す、

奥野將監　河村傳兵衛

此兩人申は、いかに人が犬と申ても、死はかなしふ候間、得下り不申と斷申す笑止かな〳〵、

小山源五左衛門　進藤源四郎

此両人いかに死のおしければとて、内蔵介を見捨て可被逃歟、扱もうたてし、

平野半平

此者逃許か、内蔵介拂物之代金三十兩ぬすみ取、京都を小路隠れす、むさき奴哉〳〵、

岡本二郎左衛門　同喜八郎

此父子奸人也

佐々小左衛門　同三左衛門

此父子臆病不及評、

長澤六郎右衛門

此者大臆病不及評、

上島彌助　田中權右衛門

此両人扱も比興、筆にも言にも不被申候、

幸田三左衛門　稲川十郎左衛門

榎戸新助　山上安右衛門

仁平郷右衛門　高谷儀左衛門

多儀太郎左衛門　豊田八太夫

各務八右衛門　陰山宗兵衛

渡部角兵衛　川田八兵衛

久下織右衛門　井子利兵衛

佐藤伊右衛門　同兵右衛門

此者共儀不及評候、右はあら〳〵書付掛御目候、徒然之御慰被成下候以上

霜月　横川勘平宗利　花押

龍田善之允様

人々御中

評し得て遺憾なしである。

斯くて討入の當夜、彼は亂格子の下着羽織の裏金絲大筋を縫ひ入れ、大小の鞘は烏帽子たゝき金の筋入り、長さ三尺二寸、是を帶びて堀部彌兵衛、村松喜兵衛、岡野金右衛門及び貝賀彌左衛門の四人と共に一隊を形づくつて大手の表門より北の方、隣家の本多邸に近い小さな新門の邊りにあつて、一つには敵の逃脫を防ぎ二つには吉良家々中の長屋〳〵の押へに備へ居つた。既にして一黨の諸士、讎家宿直の士と斬合ひ結び合へるの最中となるや、三々五々、敵は此の方面に姿を現はして邸外へ逃れんと企てた、此處に於て互に必死の戰鬪は初つたのである。當時勘平宗利は、是を限りと散々に太刀を揮つて、數人の間に懸合せ美ん事其の數敵を切靡きはしたものゝ、其の身にも亦金創を被つた。

さるほどに十五日の拂曉、一黨四十有七人のものが吉良邸へ亂入、上野介を討取つて、引揚げ來るといふ噂が電光の如く人から人に傳るや、斯くと聞いたる森家の家臣等、取る物も取敢ず門外へ群り出で、其の姿の見ゆるのを今か〳〵と待つて居た、彼の芹澤助右衛門も、勘平が斯樣〳〵だと知らせたものがあつたので扨は左樣かとばかり、駈け出して門外の群集の中から見てある折しも、四十餘人の義徒一同、兜頭巾に身を固め、或は嚴重造りの太刀を帶し、或は半弓小脇に抱へ取り、或は長槍杖に靜々と押し來つた、と其の中に横川勘平、眞黑裝束に兜頭巾を取つて腰につけ、白布でキリ、と鉢卷し、三尺二寸の大刀を横たへたが、昨宵の手合せに受けたる足傷に、同志の一人の肩を借りながら進み來る、森の家臣等これを見るより、勘平殿が彼處へ見えられたといふのを聞くより、助右衛門はハッと思つて後より延上り〳〵、目を注けて見れば、昨日に變る勘平宗利が其の姿、

「オ、勘平、やつたか」

思はず口を衝いて出た一言に、勘平フッと此方を見れば伯父夫婦がホロ〳〵と涙を滴して居るので、ハッと思ふや態と足の痛もなきかのやう、肩に掛けてゐた手を外し、凛々として歩き出したが、流石心の殘つたものか、ット後振向いた途端、思はず助右衞門と顏見合せてホロリと滴した一滴、其の儘後をも見ずして過ぎ去つたといふ。斯くて勘平宗利、間、奥田等の人々と共に水野家に引取られて翌年の二月、山中團六の介錯で美事先君の跡を追ふた、時に年三十七、法號を「及常水劍信士」といつて、今に泉岳寺の土を飾つて居る。

赤穂義士〔中卷〕

大正十一年十二月十四日發行
大正十五年四月廿四日五版發行

定價壹圓參拾錢

赤穂義士
——（中卷）——

著作者　東京市牛込區新小川町二丁目四番地
發行者　小林善八
東京市牛込區東五軒町三十番地
印刷者　下平敬一
〔文藝社印刷部印刷〕

發行所　東京市牛込區新小川町二丁目四番地（振替東京二一一〇二番）　文藝社
賣捌所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　文陽堂

小林鶯里著

〔五版出來〕

釋迦の生涯と思想

四六判美裝
三五〇頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

現今の如く思想問題の矢釜敷く論議せられるとき、本書は唯一の羅針盤である。本書は發刊以來飛ぶが如き賣行きを示し增版又增版を繰返したるは、如何に現代人がこの偉大なる思想に惹きつけられつゝあるかを證するに充分である。

本書の内容

本書は釋迦の全生涯を平易に述べ、不知不識の間に偉大なる思想を感得するやうに書いたものである。世に釋迦を書ける書多しと雖も、本書の如く誕生より入滅までを終始書きたるものは、その類を見ない。而も思想方面をも忘却することなく筆を進めたるは獨歩の感がある。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

小林鶯里著

◇忽重版◇

大楠公

四六判函入
三百餘頁
定價壹圓貳拾錢
送料六錢

忠孝の本旨が年々遠ざかる現代思想の惡化は、識者の慨歎するところ、本書は大楠公一代の偉業を史實的に通俗に筆を進め、一般家庭に向つて、この日本魂の具體化せる建武の大忠臣を偲ばしむ。

□嗚呼忠臣大楠公！　千歳にその名を留めて、忠臣の譽れ來世に高き大楠公の一生

□本書『大楠公』は！　永遠に光り輝く楠公の赤誠は、全卷をおほふて燦然たるものあり

□著者は！　既に大楠公を崇拜し、私淑せらるゝ事久しく、著者が熱誠をこめて描かれたる大楠公傳

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

講談名作集

四六判繪表紙
美裝三百餘頁
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

◇大の好二評書◇

從來講談本と云へば中流階級以上の讀者は概して其の書を手にする事を好まぬ傾向があつたが、其れには種々なる原因がある。要するに內容の野卑なると、時代風俗等に留意せず、殊更に低級に陷りつゝある爲めであつた。なれど民衆文藝の宣揚として、江戸趣味の皷吹として此の講談本を奬勵したい。從來の其の儘では或る場合讀者を害する點があるので、總てに改善を試み演者と話題とを精選し、これを善用したならば通俗敎育に利するところがある。即ち講談本を社會的讀物の列に加ふべく努力したのが本書である。本書と從來刊行された講談本とを比較し、その進歩の程度につき批判を仰ぎたいのである。

民衆文藝講談精選

四六判繪表紙
美裝三百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料八錢

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二〇一一番

小林鶯里著〔最新刊〕

眞田の智謀

四六判美表裝
函入四百餘頁
定價壹圓參拾錢
送料十二錢

著者の抱負

大衆文藝、讀物文藝、民衆文藝等の語は抑々何を語るものであらうか？著者は夙に民衆文藝の先驅者であり、主唱者であつた。この意味に於て所謂讀物の向上に、換言すれば講談の藝術化に多年の努力を傾注し、着々その實現を進めて來た。今日大衆文藝といひ、讀物文藝といふも畢竟著者の謂ふ民衆文藝に他ならなかつたのである。殊に著者は架空的讀物の力弱きを救はんとして、傳記的讀物に一新紀元を劃さんものとの苦心によつて著したのが本書である。眞田の三代記を、如何に著者が筆を進めたるか？興味高尙、而も流麗の筆によつて眞田三代記は躍如として紙面に表れたり。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二〇一一番

國民叢書

四六判美裝・定價各四拾錢
各冊百餘頁・送料各四錢

◇小林鶯里著◇

文部省認定——茗溪會推薦の國家的良書！

國民常識の源泉！　知識の寶庫！　家庭の必備書！

◇本叢書に對する讀賣新聞の批評

何も文部省が認定したからとか、東京高師の茗溪會が良書として選擇したからでもあるまいが、全く民衆大學の國民常識講座の感がある。實に普遍で通俗で明確な理解が、專門的の諸學科も面白く與へらる。まづこの叢書さへ充分に熟讀すれば大學や中學へ通學出來ないことを苦にするにも及ばない。本叢書が續々と刊行せられることはたしかに我國文化の進歩で、國民の必讀すべき良書である。

國民叢書

四六判百餘頁　各冊讀切
定價各四拾錢　送料各四錢

小林鶯里著

第一編　新しき修養

困苦しき修養より脱して知らず識らず身を修めんとし例により、格言によりて、人の履むべき道を叙べたもの。

第二編　宗教早わかり

人類の存する所必ず宗教あり。本書は世界の宗教中より十大宗教を選び、教祖、教義、今日の狀態を叙べたもの、一讀宗教の全般を知ることが出來る。

第三編　立志より成功への近道

早くものにならんとする人のため社會のあらゆる方面に亘つて立志より成功への近道を説明したもの青年子女に絶好なる讀物。

第四編　國民としての常識

國民の一人として必ず知られればならぬ事を選んで、解説を施したるもの、國民たるもの、必ず一讀すべき良書。一讀大道を濶歩せよ。

第五編　新聞を讀む基礎の知識

新聞は社會の教科書、讀まざる者は一人もない。然るに基礎の知識なくしては解する事の出來ない事がある。本書はその基礎を説明したもの。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

定價各四拾錢
送料各四錢

小林鶯里著

四六判百餘頁
各冊讀切

第六編　經濟學の知識

文明國民は經濟生活を營まなくてはならない。古來の專門的書物の弊に鑑み經濟學の根本的原理を知らせ、併せて經濟全般を極めて通俗的に論述したるもの。

第七編　日常科學の話

由來我國には科學的知識乏し。本書は吾人日常の科學現象を詳述し科學知識の普及を計らんとせるもの。先進國民の必讀書である。

第八編　偉人の修養

古人の殘した修養の跡を辿ることは現代人の忘れてならぬことである本書は偉人英雄の裏面に隱れたる修養を選擇したもの。

第九編　哲學早わかり

人生觀の樹立は萬人の要求する所哲學は難解のものとする弊を補ふため平易に述べたもの、一讀哲學全般の知識を得られるは本書である。

第十編　新しき年中行事

ともすれば忘れ勝にならんとする我國の風俗國民精神の表れともいふべき年中行事に嚴密な選擇を施し且つ叮嚀に解說したもの。

東京市小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

定價各四拾錢
送料各四錢

小林鶯里著

四六判百餘頁
各冊讀切

第十一編　藝術の話

藝術は人類に取ってなくてはならないものである。それでゐて解し難いものである。本書は藝術全般に亘つて平易な解說を試みたもの

第十二編　思想善導

思想善導の急務であることは多言を要しない。徒に六ヶ敷く堅苦しく主張してゐる秋ではない。本書は平易にその目的を果さんとしたもの。

第十三編　文化生活の基調

文化生活の高唱せらるゝ今日世人はその基調をも辨へないで徒らに上調子に流れようとする。本書はその基調を解し易く叙べたもの。

第十四編　青年の進むべき道

國家の中堅とも云ふべき青年が如何なる方面に進むべきかを述べたもので、迷路にある青年の爲めに其の進路を云したものである。

第十五編　論理學早わかり

演說にも、談話にも、文章にも常に論理學は基礎をなすものである本書の如く平易に述ぶれば論理學も決して難解のものでない。

東京市小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁 各冊讀切　小林鶯里著　定價各四拾錢 送料各四錢

第二十一編	第二十二編	第二十三編	第二十四編	第二十五編
教育學の話	倫理學の話	平凡道德	精神修養	向上發展の基礎
國家の消長は教育に基くものである。今日では教育は教育者のみに委すべきときではない。寧ろ一般人の心得べきものである。	人倫の道に就てその概要を述べたもの。最近倫理學研究の聲高し新時代のもの丶心得べき大切なる事柄である。	道は近きにあり、平凡なるもの丶中にも眞理はある。本書は平凡なもの丶中に眞理を認め吾々の行くべき道を示したもの。	吾々の修養は數多あるが、先づ第一に精神の修養をはからなくてはならない。精神の修養が出來て始めて眞の人となり得る。	吾々は向上し發展することが唯一の目的でなくてはならない。本書は向上發展の基礎を例によつて詳しく述べたもの。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁 各冊讀切　小林鶯里著　定價各四拾錢 送料各四錢

第十六編	第十七編	第十八編	第十九編	第二十編
野球の話	斯の如き人は成功する	心理學の話	婦人の進むべき道	理想の家庭
現時如何なる山間の地でも野球の行はれて居ないところはない。本書は初めて野球をやる人のため、若くは野球を見る人のために解り易く述べたものである。	成功すべき人はどこかに人に秀でた性質を持つて居る。本書は古來の成功者中から成功すべき性質を抽象して述べたもの。成功者の福音。	吾々はまづ自身を知らなくてはならない。本書は心理學といふ學問を平易に而も通俗的に叙述して國民一般に心理を了解させやうとしたもの。	婦人問題のやかましい折柄婦人の進むべき道を明かにすることは何よりも大切である本書に依れば誤りなき進路を見出し得るのである	家庭生活は人間生活の根本である本書は有らゆる方面より考察して理想的家庭を建設する指導をなすものである。

東京市牛込區新小川町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

定價各四拾錢
送料各四錢

四六判百餘頁
各冊讀切

小林鶯里著

第二十六編

佛陀の福音

釋迦の事蹟は不朽である。その教は經典に示してゐるが、餘りに大部である。本書はその中の最も大切なものを抄錄したものである。

第二十七編

基督の福音

キリストの愛は萬物を包むその言葉は新舊約全書にあるが、本書はその中から代表的のものを選んだものである。

第二十八編

無線電話早わかり

最近無線電話の進歩は著しいものである。所がその進歩が餘り著しきため、まだ民衆一般に了解せられてゐない。本書は極めて平明に圖を多く入れて說明せるもの。

第二十九編

無線電話の知識

無線電話に關する書は多くとも何れも解し難い。本書は無線電話に關するあらゆる方面の質疑に應答し、無線電話に關する凡てを明かにせるもの。

第三十編

世界の格言と警句

格言とか、警句とかは不朽の生命をもち、深淵な眞理をもつてゐるものである。本書は世界の格言と警句との中から精選してその粹を集めたもの。

東京市小川町牛込區新二ノ四
文藝社
振替口座東京三一一〇二番

國民叢書

定價各四拾錢
送料各四錢

四六判百餘頁
各冊讀切

小林鶯里著

第三十一編

家庭科學の話

日常吾々の遭遇する自然現象の中でも家庭生活、日常生活に最も密接なるものが多々ある。本書はこの常識的科學を說いたもの。

第三十二編

普通選擧の話

多年懸案であつた普通選擧法も通過した今日、國民たるものは何人もこの法を心得てゐなくてはならない。本書は平易に之を解釋す。

第三十三編

政黨早わかり

一國の政治は政黨を度外視して考へる事は出來ない、本書は政黨に關する一般を述べて、政黨政治を明かにせるもの。

第三十四編

貯金のすゝめ

生活の安定は總ての根本である。それには日頃の貯へがなくてはならない。本書は貯金に關する道を詳しく說いたものである。

第三十五編

音樂の知識

音樂は最近著しい發展を示して來た。何人も音樂の如何なるものの位は心得て居なくてはならない。本書は音樂一般の知識を述べしもの

東京市小川町牛込區新二ノ四
文藝社
振替口座東京三一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁 各書切賣
定價各四拾錢 送料各四錢

小林鶯里著

第三十六編

公民としての心得

公民教育の必要は現下一般の風潮である。當局を始め一般爲政者は等しく國民に向つて、これが普及をはかつてゐる。本書は材料の選擇に十分の注意を拂つてあるもの

第三十七編

成人教育の話

公民教育が必要であると共に、皆が文化の程度を高めるには成人の教育が必要である。本書は成人として欠くことの出來ない事項を平易に且つ明快に述べたもの

第三十八編

農村發展の基礎

農村の發展は國家の發展の因をなすものである。今日農村問題といへば枝葉にのみ論議を下す傾きがある。本書は根本的の問題をとらへ農村發展の基礎を述べしもの。

第三十九編

日本地理の話

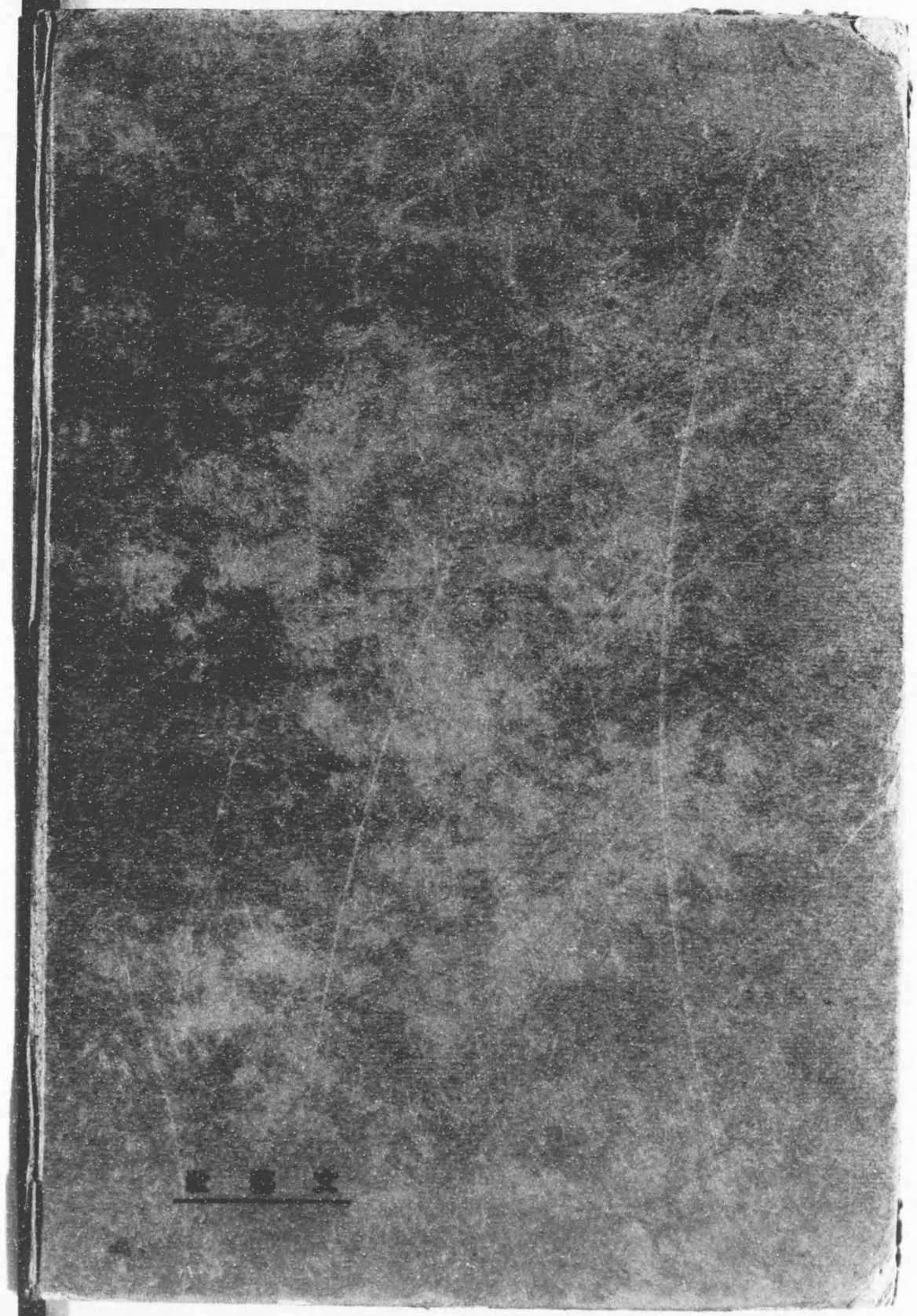
自分の國の地理を知らぬは自分の家を知らぬも同樣である。本書は詳細ではないが、日本地理の粹を拔いて書いたもので、國民たるものゝ必備の知識である。

第四十編

全國名所めぐり

わが國の名所は多いが、何れも案内の行き屆かないものが多い。或は案内があつても專門的になり易い。本書は全國の名所を美文にて表はせるもの。座ながらに旅が出來る。

東京市牛込區新小川町二ノ四
文藝社
振替口座東京三一一〇二番

551
137

終